

Ⅳ 労働支援活動

1. 労働支援活動の総括

2018年度は、報酬改定による影響の把握とその対策で幕を開けた。「働きたい」と願う障害のある人は多く、各所を利用するメンバーの利用実績は上がる一方で、基本報酬の減額や加算の廃止を受けての減収や、慢性的な職員不足の中で、厳しい事業所運営を迫られた1年となった。

メンバーの「働きたい」という思いを実現していくため、各所で地域に根差した活動展開を意識し、事業に取り組んだ。やどかり情報館で行ったピアサポーター養成プログラムには、6人が受講し、4人が実習した。精神保健福祉の歴史や現状を学んだり、実際にピアサポーターとして働くメンバーや外部講師の話聞くなどのプログラムを行った。受講した人の中には、グループホームでピアサポーターとして働く人も出るなど、メンバーの体験と専門性を活かした働き方が広がり始めている。

労働支援会議は、月1回のペースで開催し、実践報告や情報共有を行った。

4月からルポーズと統合し、分場として運営してきた「まごころ」は、メンバーとの話し合いを重ね、3月末で閉所した。

1) 事業所連携を活かした仕事づくり

2017年度に引き続き、事業所間で協力しながら、週1回のピアショップ販売に取り組んだ。各区役所に加え、4月からさいたま市子ども家庭総合支援センター「あいぱれっと」での販売も始まった。ピアショップへの参加も2年が経過し、常連のお客様も出てきて、売り上げは微増している。また、さいたま市合併記念公園で開催される春まつり、秋まつり、アートフルゆめまつりなどへのイベント出店にも協力して取り組んだ。

また、あゆみ舎の軽作業の一部をすてあーずと分担したり、やどかり農園の野菜販売をあゆみ舎が担ったり、やどかり農園の閑散期にすてあーずの糸切り作業に取り組むなど、複数事業所で協力して作業や販売に取り組んだ。慢性的な職員不足、働くメンバーの障害の状況変化や高齢化などの課題に対して、連携して取り組みを始めている。各所が抱えている現状を共有し、働く場のあり方や機能整理を行い、メンバーにとって働きやすい環境を整えていくために、今後も継続して検討を進めていく。

2) 企業就労を希望する人への支援の充実

就労移行事業を運営するやどかり情報館とエンジュを中心に、企業就労を希望する人への支援に取り組んだ。

医療生協さいたまから、障害者雇用を進めていきたいとの相談があり、障害のある人に合わせた仕事内容や配慮について、いっしょに検討し、1人が就職した。

また、企業での就労を希望する人に対しては、実際に企業就労したメンバーの話聞く機会を設けたり、ハローワーク主催の県南合同就職面接会への参加に向けた事前準備について個別に対応するなどした。

3) 働く場での仲間づくり

やどかりの里の働く場を利用して1年目から2年目の人たちを対象に「豆の木の家」を開催した。働き始めの心細い時期に仲間をつくり、横のつながりをつくり、支え合いながら働いていかれることを意識したグループ活動である。メンバー7人が参加し、2人の職員が担当した。グループ活動を企画するにあたっては、メンバー交流会議でメンバーから意見をもらい、その意見を参考に企画した。働く場では、メンバーも仕事に臨む気力と体力に気持ちが向きがちだが、継続のために必要な生活の安定に関しても、互いの知恵や工夫を出し合い、話し合える場となった。

2. すてあーず

定員 20 人。新規利用者は 4 人。退所者 11 人（他事業所利用 6 人、在宅 5 人）となり、登録者数 34 人（3 月末）。

体調不良や家庭の事情により長期欠席となっていた登録者に対し、障害者生活支援センター等と調整しながら、改めて継続の意思確認等を行ったため、退所者が多くなった。

1) 製作部門

製品の質の向上を目指しつつ、生産性を高めていくための取り組みを意識した。今年度前半は「製作ミーティング」を行い、布・革の作業ごとに、既存製品の見直し、技術アップや新製品について話し合った。すてあーずの製品づくりで大切にしていくことや課題を共有し、それぞれが意識して働ける環境づくりに努めた。また、技術アップのための講習を行ったことで、作業の幅を広げ、新しい作業に取り組むメンバーも増えた。

月 1 回、講師による革の技術指導を継続した。技術の向上とともにそれぞれの自信につながっている。日々の製作での疑問を、プロの革職人に確認し学べることで、確実に質の良い製品の製作に結びつけられている。

埼玉県障害者アートネットワークにも引き続き参加した。販売会の際に製品を見た人から別のイベントにも出店依頼があり、新座市でのイベントに初参加することができた。

2) 店舗（リサイクル）部門

お客様により喜んでもらえる店舗運営を改めて考え、集客力を上げるためのレイアウト変更に入力して取り組んだ。4 月から毎月話し合いを重ね、「集客力チェックリスト」を作成して現状・改善点の整理を行った。①

新規顧客の獲得、② より多くの品物を見やすく陳列するための店内レイアウト、③ みんなが気持ちよく働ける環境整備、をポイントに意見を出し合い、看板や窓など外観の工夫や、陳列棚など什器の工夫を考えた。作

業は、古い什器をリメイクしたり、木材から新しい棚を製作したりと、自分たちの手作業で行った。大きな窓にはメンバーが絵を描き、外からも目を引くような工夫をした。レイアウト変更後、お客様からは、「店内の雰囲気はよくなった、見やすくなった」「窓のイラストが素敵ね」等の声があった。また、店舗のレイアウト変更とともに手狭だった作業場を整理し、働きやすい環境を整備した。作業台を増やしたことで、より多くのメンバーが同一時間帯に働けるようになった。

浴衣地をリメイクする布ぞうりの製作を引き続き行った。作り手を増やし、技術の向上を図るため、編み方の講習を行った。講習としてしっかり時間を取ることで、工程を身につけることができ、作業全体の流れを知ることがやりがいにもつながった。

3) 軽作業の取り組み

4 年目となるアンテナ部品の軽作業を継続した。また新たに、あゆみ舎の軽作業を一部委託を受け行った。同じ工程の作業が一定量確保できたことで、これまでのすてあーずの作業では難しかった人も取り組めるものとなり、仕事の幅が広がっている。2019 年度に向けて、エンジュが請け負っている軽作業の受託を進めている。

4) 今後に向けて

講習や技術指導、日々の製作活動の中で技術が向上し、作業の幅が広がることで、生産性も上がった。しかし、売り上げを伸ばし工賃向上を目指していくには、今後の販路の拡大と同時に、技術向上、生産性を高めていくことが継続の課題となってくる。製作全体の工程・流れを見直し整理しながら、1 人 1 人の得意な面を活かし働ける環境、仕組みづくりを進めていく。また、新製品の開発や講習など学び合いながら技術を身につけていく時間も大切にしていく。

1 人 1 人の目標や多様な働き方に対応していくには、より仕事の幅を広げていくことが必要である。店舗と製作部門で協力したりリサイクル品を活用した作業や、他事業所との連携をしながら、仕事の拡充を検討していく。

3. あゆみ舎

定員 20 人。新規利用者は 8 人、退所者 8 人、登録者数 46 人（3 月末）。

報酬改定を受け、あゆみ舎は減収が見込まれた。その対策と 2017 年度実利用者数が増加しなかったことを考え、定員を 23 人から 20 人に変更し、報酬改定による影響をできるだけ少なくすることができた。

1) 選択できる仕事づくり

あゆみ舎では、1 人 1 人が得意なことを活かし、その人に合った仕事を選択できるよう、あゆみ舎が請け負う仕事の幅を広げていくことを大切にしている。

あゆみ舎の仕事は軽作業を中心とした室内作業や事業所の外に出向くメール便の配達やピアショップ販売、やどかり農園の野菜の販売などを行っている。今年度新たな仕事として、埼玉県セルフセンター協議会を通して民間駐車場の清掃を受託した。8 か所を 3 つのコースに分けて月に 1 回清掃している。駐車場には煙草の吸殻や空き缶、コンビニ弁当の容器、鉄パイプなどが捨てられていたり、落ち葉や雑草も多く、それらを回収する骨の折れる作業となっている。受託料とのバランスもとれることから、あゆみ舎の中では唯一最低賃金を保障する仕事とした。

また、週 1 回のランチの提供と、感染症の蔓延を防ぐことを目的に、職場環境を整える一環として、ランチづくりで使用する布巾とタオルの漂白や、共用スリッパのアルコール消毒などの衛生管理をメンバーが仕事として担うことになった。

職員配置が少ない中で、メンバーの力を活かして効率的に仕事に取り組むことで、一定の仕事量を確保し、メンバーが自分に合った仕事を選択することができた。来年度も全体ミーティングなどを通して情報の共有や話し合いの機会を確保し、メンバーと職員が協働

できる土台を固め、更にメンバーの力を活かしていきたい。

2) 健康や人生の節目を意識した取り組み

働く場は単に仕事を提供する場ではなく、その人の暮らしの一部である。健康づくりを意識した週 1 回のランチの提供とスポーツレクリエーションを暮らしに役立つ取り組みとして行った。「安くておいしい」「みんなで食べると楽しい」「汗をかくと気持ちがいい」と、いずれも好評である。また、人生の節目を感じられる取り組みとして、誕生日と長寿のお祝いを行った。誕生日のお祝いは、勤務日が重なればその日に、重ならない人は誕生日に一番近い勤務の日に、ルポーズのお菓子と缶コーヒーをプレゼントしている。長寿のお祝いは初めての取り組みであったため、既に還暦や古希を迎えている 9 人をお祝いする会を 3 月に開催した。美味しい料理とカラオケで楽しいひと時となった。

3) 今後に向けて

あゆみ舎では毎年 2 回の防災訓練や災害伝言ダイヤルの使用練習を行っている。今年度よりあゆみ舎は法人の防災拠点の 1 つとなった。防災拠点に必要な書類等は一定整っているが、備蓄食糧はこれからの整備となる。また、あゆみ舎の作業場は棚の固定などができておらず、地震への対処が弱い。災害時の拠点として機能できる環境を整えていく。

この数年で、法人内で業務を横断的に取り組むといった事業所連携が充実してきた。あゆみ舎ではやどかり農園の野菜の委託販売やすてあーずへ軽作業を提供した。またパソコンの分解分別作業や、週 1 回のランチづくりでは、やどかり情報館に所属しているピアサポーターが活躍している。あゆみ舎だけの枠組みで仕事づくりや職場の態勢を捉えるのではなく、法人全体を視野に入れていくことで、働く場としての可能性が広がる。また、地域とのつながりづくりを模索しながら、身近な地域にとってどんな働く場が必要なのかについてもビジョンを描いていきたい。

4. ルポーズ

主たる事業所ルポーズ 定員 20人
従たる事業所まごころ 定員 10人
新規利用者 9人 退所者 5人
登録者 48人（3月末）

まごころと統合、一体的な運営体制とし、喫茶店運営事業、弁当製造販売事業、農作物販売事業、菓子製造販売事業を主な収益事業として今年度も取り組んだ。

1) 収益事業の取り組み

喫茶店運営事業は年間営業日253日（喫茶店営業日238日、その他イベント等の外部販売15日）、店舗来店客数7,200人（6,120人、前年度比17%増）、喫茶営業売上額は403万円（356万円、前年度比13%増）となった。新規顧客も増加しており、特に子ども連れのお客様が来店される頻度が高くなった。お客様同士、お隣の席から声をかけ合う姿も見られ、気兼ねなく会話が交わされる光景が印象的だった。

弁当製造販売事業は、今期掲げた製造販売数（1日50食）を達成することができた。喫茶店メニューの弁当販売も開始し、新たな販売先も開拓した。

農作物販売は、これまでどおり夏秋期における梨販売（贈答用249ケース、店頭袋売り231袋）、米販売も継続して行った。

菓子製造販売事業も、注文販売等の依頼が前年同様あり、売上増となった。小中学校でのお祝いや、老人ホームでの憩いの時間にご利用いただき、たいへん喜ばれた。ルポーズ、まごころ両店舗で製造を行い、製造能力の向上と販売先の増加がバランスよく達成できた。

外部販売も積極的に行い、特に見沼区役所内にある「ピアショップ」では、各労働支援事業所で連携し、毎週販売を行い、顧客獲得と宣伝に役立っている。地域のお祭りやバザー

等にも参加し、売上げに貢献した。

その他販促活動として、割引券を付けた販促チラシ等を近所にポスティングし、新たな顧客の獲得に結び付いている。

2) 事業所運営について

ルポーズ事業運営委員会を毎月1回開催、店舗営業に関する話し合いを継続的に行った。まごころとの統合もあり、どのように進めていけば一体的な運営が行えるか、メンバー相互の関わりや仕事の進め方等、検討した。前述のとおり、菓子製造と弁当製造販売において、職員、メンバーとも両店舗を行き来しながら、製造能力の向上に結び付け、また一体となった運営に注力した。年間を通したイベント・レクリエーションを企画、運営するイベント係を選出し、1～2か月に1回の頻度で集まる機会を設け、親睦を深めた。特に日帰り旅行では、楽しい時間を過ごした。

例年行ってきた食品衛生に関する講習会や、技術習得に関する勉強会、他事業所見学会などが開催できなかったことが、2019年度に向けた課題である。

3) 次年度に向けて

1年間にわたってルポーズ・まごころ統合後の将来を、特に事業運営委員会で話し合ってきた。さまざまな方策や案を検討し、可能性を探ってきた1年でもあった。

2月にはルポーズの今後を考える会（31名参加）を開催し、検討した。

働きたい希望者が増えなかったこと（地理的要因による影響が大きい）、収支バランス状況、来期の職員配置などを考慮し、3月末日でまごころ分場を廃止（弁当製造販売を終了）、新たにスタートを切ることとした。

3月には、「まごころお別れ会」を行い、各メンバーからまごころのこれまでと、思いを語り合った。「まごころがなくなるのは寂しいけれど、ルポーズとして一体となって、これからはみんなで盛り上げて頑張っていこう」と締めくくった。その気持ちを大切に、次年度につなげていく。

5. エンジュ

定員 39 人 (B 型 33 人, 就労移行 6 人). 新規利用者 (B 型 11 人, 就労移行 3 人). 退所者 (B 型 15 人, 就労移行 3 人) で登録者 59 人 (B 型 58 人, 就労移行 1 人). (3 月末)

障害福祉サービスの報酬が 4 月から改定された. 報酬改定によって「成果主義」が強調され, 「生産性」や「効率性」を現場に求め, 同時に大きな減収が見込まれた. 昨年度 B 型利用実績 7,669 人, 今年度 7,917 人と 248 人増の利用となった. 障害のある人の「働くこと」を保障するうえで, 障害の状況や特性に応じて労働日数や労働時間の合理的配慮する必要性を重視している. 成果主義中心の報酬基準は, 障害のある人の利用を妨げる方向になりかねなく, 厳しい事業運営となった.

きょうされん TOMO の取材を 4 月に受け, お弁当宅配でなく, 地域とのつながりのある事業報告を行った. きょうされんの報酬改定関連で, 1 月に NHK ニュースに取り上げられ, 事業所とメンバーが取材を受けた.

2017 年度, 夕食事業の受託が増え, 配達員不足問題から機関紙等で配達員のお願いをした. 会員の方や家族会から反響があり, 協力をいただいた 1 年となった.

1) 生産事業

(1) 昼食事業

年間 42,221 食. 1 日平均 177 食の提供を行った. 個別弁当利用者 50 人, 外部事業所 5 か所, やどかりの里事業所 10 か所, 新規弁当利用者 26 人, 中止した利用者 24 人.

新規利用者は, 高齢者の利用は少なく, 食事制限が必要とされた障害のある人や金銭管理が困難となり食事の手配を先にできないかという支援機関からの相談ケースが増えた. 紹介者は, 地域包括支援センターから病院のワーカーやヘルパーからの問い合わせと変化してきた.

月 1 回の「世界のグルメ」メニューは, ギリシャ, シンガポール, オーストラリア, タ

イ, チリ, ポーランド, フランス, 韓国, オランダ, フィリピンと 10 か国. 他, 防災の日にちなんでカンカンライス, 敬老メニュー, お彼岸メニューなど季節を感じる食を味わうメニューで 1 回に 235 食提供する日もあった.

(2) 夕食事業

年間 33,255 食. 1 日平均 137 食の提供を行った. さいたま市在宅高齢者等宅配食事サービス事業の見沼区・大宮区・緑区及び北区の一部を受託した. 他, 引き続きやどかりの里の地域活動支援センターから食事支援業務を受託. また, 近隣で食事制限が必要な人に提供した.

食事制限が必要な人が増え, ご飯のグラム変更や刻み食, おかゆ食といった対応が増え, 即日対応を心掛けた. 一方で, 好き嫌いによるキャンセル, 当日のキャンセルが多く, 事務対応が追い付かず, 注文のミスが多かった. 利用者が離れていかないようミスの原因と防止策を検討する必要がある.

(3) 菓子製造販売

例年注文をいただいている幼稚園や老人ホームからの注文もあり, 定期的な製造・販売ができた.

近年の健康ブームもあり, 健康効果のある朝食やおやつにもなる「グラノーラ」を製造・販売した. 注文があった時など限定的な販売であったが, 思わぬところから注文があるなど好評を得ている. 今後, ルーティンで製造できる体制を準備していきたい.

(4) 軽作業

歯科医院で使用するデンタルシートやクロストレイなどの袋詰めを行った. どれも院内で使用するため衛生的に行うことが求められる作業であった. 週単位で作業量と作業内容を企業と相談し, 受注した. 自主的に取り組めるメンバーが増え, 作業効率のための手順など提案が出るようになった. メンバーといっしょに業者への納品を行い, 企業との関係づくりにもなった. 企業からの評価も高く, 試作品などの仕事も随時相談されるようになった.

2) 障害のある人の労働を支える場として

(1) 働く場の環境整備

月1回の定例会議を開催した。3月に1年を振り返る機会を持った。

「休みが多かった。仕事は一生懸命やっているが、頑張った後に休んでしまうことがないように努力したい」

「入院して迷惑をかけた。体調管理をして仕事に穴をあけないようにしたい」

「心に余裕をもって過ごしたい」

「1日、1週間、1か月、1年と早く感じた。ときめいて仕事をしたい」

「事務仕事だけだったが、厨房の仕事に入れるようになり頑張った」

「100%休まず来られた。今後も充実した仕事がしたい」

「働く時間は短いけど、休まず来れている。今後はA型事業所に行くことが決まっているが、たまにエンジュに顔を出しますのでよろしくをお願いします」

「午前だけの勤務から午後の勤務も頑張る時間を延ばした。休まずできているので一般就労を目指したい」

「時間を延ばした。体調がよくなってきた」

「自分なりに頑張った。早退を減らしたい」

「成長させてもらっている。頑張っているからこの調子でやっていきたい」

「一泊旅行と日帰り旅行でディズニーシーに行けたことはよかった」

「日帰り旅行で去年は、ディズニーランド、今年はディズニーシーと続けて行けたことがよかった」

「体調を崩し、山あり谷ありだが、旅行もあり楽しく、仕事でも助け合っていければ大丈夫」

休みがちだった人と休まず来られた人とさまざまだが、休みがちなメンバーからは、仕事に穴をあけ、迷惑をかけてしまったなど周囲に配慮しつつ、ともにみんなと頑張りたい気持ちが伝わった。また、曜日、時間を延ばし、継続して出勤した人からは、次のステップにつなげる前向きな発言がでた。会議

では、自分たちの意見を率直に言い合い、認め合い、互いを助け合っていることを確認し、仕事を通して関係づくりの場となっている。

(2) 受付ミーティング

受付業務を担当するメンバーを対象に毎月1回定期的に開催した。電話対応が集中する午前中の受付を2人態勢で役割分担して取り組むことが定着した。パートナーがお休みとなっても慌てることなく、マニュアルに沿って1人で取り組めるようにもなった。また、自分が担当の日以外でも、担当の人が欠席した時など積極的にカバーしていた。

ほとんどのメンバーは、不安と緊張がありながらも電話対応をすることができるようになり、自信をつけてきた。しかし、内線のつなげ方など電話機の操作方法が難しいとの意見もあった。取り組みやすくなるよう工夫していきたい。

(3) ダイエットプログラム

毎月1回5～6人の参加で開催した。ミーティングの他、身体を動かすことを取り入れて卓球、ひとり鍋調理実習を行った。卓球は、手軽に移動時間もなくてできるよう、ホールの作業机を代用して行った。参加者からもかなりの運動量となり、楽しめたと感想が上がった。調理実習は、その後も家で活用できる内容で行った。今後もメンバーの意見を積極的に取り入れ、新たな挑戦と結果に結びつくようなプログラムを行っていく。

3) 今後に向けて

職員が手薄な中でそれぞれが仕事の幅を広げてきている。仕事の幅を増やしていくための伴走や見守りの環境づくりを行いながら、1人1人の課題や目標に向き合いつつ、生産力に結びつけていく。

「早い、おいしい、気持ちよい」をモットーに安心、安全な食事提供とともに効率的にかつ忙しくともコミュニケーションを取りながら、1人1人の力を活かし、生産性の向上に結びつけていきたい。

6. やどかり情報館

定員 36 人（A 型 15 人，B 型 15 人，就労移行 6 人），新規利用者（A 型 1 人，B 型 2 人，就労移行 4 人），退所者（A 型 3 人，B 型 2 人，就労移行 4 人）で登録者 36 人（A 型 18 人，B 型 14 人，就労移行 4 人）（3 月末）

2018 年度には新たにピアサポーター養成プログラムを開催した。7 月にスタートし，6 人が受講した。先輩のピアサポーターの経験に学び，先輩の経験に自分の経験を重ね合わせて，ピアサポーターの役割や重要性を学んだ。実習後，グループホームで非常勤として働き始めた人や現在実習中の人がいる。

やどかり出版では，ドキュメンタリー映画「夜明け前」（呉秀三の歩みと日本の精神医療の歴史をたどった作品）の上映運動に呼応して，現在の精神保健福祉の現状や改革の必要性を訴えるイラスト中心のリーフレットを作成し，全国に広めた。

やどかり農園では，新製品の開発を進め，販路開拓・拡大に資するネットワークづくりを進めた。

1) やどかり出版

メンバーのスキルアップのため「編集実務研修」全 6 回を実施（職員 1 人，メンバー 7 人受講）。ブックレット編集委員会が中心になって，第 34 回体験発表会を浦和コミュニティセンターで開催，81 人の参加を得た。

(1) 編集部

① 単行本 〈単行本一覧〉

- ・やどかりブックレット 25 『統合失調症を生き抜いた人生』2019 年 3 月
- ・『保健師が行う家庭訪問 第 2 版』2018 年 11 月
〈外注・自費出版〉
- ・「精神保健福祉学の重要な概念・用語の表記のあり方に関する報告書」2018 年 5 月
- ・『森田療法の世界』2018 年 8 月
- ・『集い学びつながるあしたへ 世田谷さくら

会 50 年のあゆみ』2018 年 10 月

- ・『みんなの茶の間 浜砂会』2018 年 11 月
- ・「日本精神障害者リハビリテーション学会プログラム・抄録集」2018 年 11 月
- ・『ソーシャルワーカーとして歩んできた道，そしてこれから』2019 年 3 月
〈その他〉

・リーフレット「今こそ変えよう 日本の精神保健福祉 明けない夜はない」2018 年 9 月

② 雑誌『響き合う街で』

84 号「『我が事・丸ごと』の実相」，85 号「現場実践に学ぶ地域づくり」，86 号「“二重の不幸”から 100 年」を刊行。刊行ペースを戻すべく，企画・制作態勢を再編した。

③ 営業チーム

出張販売，内部・外部営業，棚卸等，販売促進と在庫管理にメンバー主導で取り組んだ。

(2) 文化事業部

看護・福祉系学生の体験研修や家族会の見学会（7 団体，290 人）を受け入れ，メンバーの講師派遣依頼にも対応した。体験交流会を 4 回行い，講師の養成にも努めている。

2) やどかり印刷

やどかりの里外部 160 件，内部 54 件，やどかり情報館内 27 件，年賀・喪中印刷 33 件に対応した。

(1) 印刷・製本部門

従業員それぞれが作業効率を意識し，印刷物の質の向上に向け量産形成に取り組んだ。機械の老朽化の心配があり，メンテナンスや修理をしながら操作している。印刷物は，外部業者とも連携し対応。作業工程の共有と調整を行い，納期を守ることができた。

(2) DTP・CTP 部門

オペレーターは，InDesign や Illustrator，Photoshop などを使い，作業工程の最終段階まで担えるように取り組んだ。習得した技術を後輩に伝える機会も増えた。

(3) IT ソリューション部門

WEB サイトの管理をやどかりの里内部，外

部から請け負っている。やどかり情報館内でも IT を活用することが多く、インターネット環境の保守管理を行った。外部からの WEB サイト制作の要望もあり、価格を整理し提示できるようにした。

(4) 営業部門

新たな顧客が広がり、広報誌の作成やリーフレット作成などの依頼があった。来年度に向けて、印刷物の価格の見直しを行い、新規顧客獲得の営業を進めていきたい。

3) やどかり研究所

第 10 回やどかりの里・人づくりセミナーの開催準備が今年度の活動の柱であった。8 回開催した運営委員会だが、4 回はセミナー実行委員会と合わせて開催した。

2018 年 2 月に研究所運営委員の 2 人がベルギーの精神医療改革の視察に参加したこともあり、研究所の学習会でベルギーの精神医療改革を学ぶ機会を設けた。

(1) プロジェクト見沼

昨年度に引き続き、大宮駅東口開発に関しておおみやコミュニティの“わ”女性の会など市民活動に参画した。また今年度はよみさんぽの編集会議に時間を割き、「さいたま見沼よみさんぽ」への改題、「身近な生き物」を年間テーマに設けるなど誌面のリニューアルを図った。取材を通じて芝川小学校とつながり、サポートステーションでヤギを預かるなど地域との関係性が深まった。

(2) 学習会・サロン

- ・ 6 月 16 日 (土) 学習会「ベルギーの精神医療改革と私たち」講師：岡田久実子さん (もくせい家族会)、大澤美紀さん、増田一世さん
- ・ 7 月 28 日 (土) 研究集会「障害者・高齢者の生存に関わる政策研究」生存科学研究所、日本健康福祉政策学会と共催。
- ・ 10 月 11 日 (木) サロン「SDGs は世界中の良心を紡ぐ最初で最後のチャンス」講師：藤田雅美さん (国立国際医療研究センター国際医療協力局連携協力部)

(3) やどかり研究所報告・交流集会

3 月 9 日 (土)、やどかり情報館で開催。実践・研究報告は、外部から 2 題、内部から 2 題の報告があった。特別企画は「権利としての健康を学び・実践しよう」がテーマ。講師に、松田正巳さん (東京家政学院大学人間栄養学部)、高田早織さん (ミズノインストラクター) を招き、人権としての健康について学び、実際にエクササイズも行った。

(4) 調査・研究協力

2 件の調査研究に協力した。

- ・ 松井亮輔先生 (障害者雇用・就労研究会代表 法政大学名誉教授)「障害者のディーセント・ワーク実現に向けて求められる施策のあり方に関する調査研究－就労継続支援 A 型事業利用者へのヒアリング調査を通して」
- ・ 全 A ネット (国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所)「A 型事業所における精神障害者の短時間労働について」

(5) 人づくりセミナー

丸地信弘先生 (やどかり研究所顧問・元信州大学医学部公衆衛生学教授) に参加していただき、実行委員会を設け、研究所運営委員会が事務局的功能を果たした。公益社団法人やどかりの里の機能整理、グループホーム、エンジュ、やどかり農園などのレポートを作成し、11 月 23 日～24 日にやどかり情報館で開催した。外部の参加者、メンバー、家族、職員 41 人が参加した。WEB 上の掲示板を活用し、事前の情報発信やコミュニケーションを行い、新たな形でのセミナー開催となった。

普段使いなれないモデルを活用しながら、自身の活動を客観化すること、発想を切り替えること等々、新たな気づきを得た。その中でやどかりの里の活動の方向性も考える機会となった。このセミナーでの成果を 50 周年記念出版に活かすべく、研究所運営委員会で検討を進めている。

4) やどかり農園

作付け 4 年目を迎え、栽培管理と作業技術は向上したが、今季の記録的な高温と台風の影響から、収穫量、収益ともに減少した。冬

には関連する加工品の野菜不足で、協力農家から仕入れざるを得ない状況となった。

気候変動による異常気象に対しては、常に天候リスクを考え、対策を準備しておくことが重要であることを学んだ。

4月から、明石農園と作業請負契約を結び、週に一度の施設外就労を開始した。当初は希望者も多く順調に実施できたが、移動時間の長さや作業量増大の負担から、徐々に希望者が減り、作業請負の実施が難しくなった。来年度は、施設外就労先を含め実施の見直しを行う予定である。

(1) 畑作業

① 畑の開拓

新たに上野田に休耕地を借り受け、緑肥を播種し、畑再生に向けた土づくりを開始した。

② 無肥料・自然栽培

作付面積が約4反となり、年間を通して32品目39品種の野菜を栽培。収穫した野菜は、あゆみ舎と連携し、法人内外で販売した。

③ 備品等整備

冷凍・冷蔵庫の故障に伴い、外置きのプレハブ冷蔵庫と室内用冷凍・冷蔵庫を購入した。

(2) 農産物加工

① 農産物の加工・販売

干し芋5種、乾燥野菜21種を商品として販売。パッケージの改良に取り組んだ。

② 外部委託作業

外部団体から乾燥しいたけ、乾燥きくらげの製造を委託され乾燥作業を行った。

③ NPO、外部福祉団体との共同作業

NPOと連携し、ベトナム産のカカオ豆とカシューナッツをフェアトレードで輸入、外部の福祉団体と共同でハンドメイドチョコレートと焙煎カカオ商品の試作を行った。

(3) 交流・学習

7月 タジキスタン視察団との交流、早稲田大まちづくりシンポ参加

8月 ブルーベリープラザ浦和、自然栽培

マキヤでブルーベリー収穫体験

10月 江原梨園でキウイ収穫体験、自然栽培フェスタ2018出店

11月 トキタ種苗大根研究農場講演会、パーマカルチャー視察

12月 フェアトレードフェスタ川口出店

1月 オーガニックシンポ参加、ノウフクシンポ参加

2月 ベトナムのカカオ農場と加工場視察

3月 味噌づくり教室実施、クッキープロジェクト販売研修会参加

(4) 販路、仕事の開拓

新規に、わくわく広場（与野、北戸田、宮原）、カフェティコ、バオバブ、こむぎ、バナナカフェ、人つながるカフェ Hito-tsu と委託販売契約。（株）ベストワークと植木（挿し木）の作業請負契約を結び、取引先開拓と新たな仕事づくりに取り組んだ。

5) 協働ネットワーク事業

地域の資源と環境に注目し、ネットワークを活かした仕事づくりに取り組んだ。

さいたま市営霊園の植栽管理業務請負、伝統的地場産業の苗木の挿木作業、埼玉スタジアムやリンガーハットの除草業務、地域交流やイベントへの参加など、複数事業所の連携で就労機会の拡大を図った。

6) ピアサポート事業

サポートステーションやどかり、あゆみ舎、すてあーずにピアサポーター3人を派遣した。3か所の地域活動支援センターの夕食の宅配にも5人が従事した。法人内のニーズもあり、今後もピアサポーター養成に努めていく。

7) やどかり塾

やどかりの里の常勤職員で入職1年目～3年目までの人を対象に全体での研修（隔月）と記録に基づく2つのグループに分かれての研修を実施した。

Ⅸ セルフヘルプネットワーク

1. メンバー交流会

1)メンバー交流会議の開催

今年度もメンバー交流会議を6回開催し、話し合った。

「メンバーの横のつながり」「いろいろな人たちとの出会い」「やどかりの里の将来像を考え合う」「メンバーの力を反映させる仕組みづくり」の4つの柱をコンセプトに、各事業所から参加者を募り、話し合いをもとに第12回・第13回のメンバー交流会を開催した。

2) 第12回メンバー交流会「BBQ大会」の開催

第12回メンバー交流会「BBQ大会」を、5月にさぎ山記念公園で行った。毎年恒例行事として定着し、77人の参加者があった。多くの人たちと交流し、分担して協力しながら、楽しく進められた。当日は雨模様であり、対策等不十分なところもあったが、「火起こしなど手伝ってくれるメンバーが多くてスムーズだった」「肉もおいしくて量もよかった」等、好評だった一方で、「慌ただしかった」「あまり交流する機会が持てなかった」等の感想もあり、次年度に向け、開催時期や進め方を検討、改善していく。

3) 第13回メンバー交流会「秋のスポーツ大会」の開催

第13回メンバー交流会「秋のスポーツ大会」を10月に行った。障害者交流センターのグ



ラウンドを借り、キックベース、グラウンドゴルフの2種目を行った。37人の参加者で、好天のもと、気持ちのいい汗を流した。午前中より競技を行い、昼食も用意され、午後には表彰式、感想などを全員で出し合いながら、楽しいひと時を過ごした。優秀チームや個人には賞状と賞品もあり、「これまであまり表彰をされたことがなくて、うれしかった」「試合に集中して、とても楽しかった」等の感想があった。

4) メンバー理事の推薦

法人役員の任期満了にあたり、メンバー交流会議参加者より、公益社団法人の理事に3人が就任した。

5) 今後の取り組みについて

メンバー交流会議が組織され8年目を迎える。これまでの取り組みと経過をふまえ、今後のメンバー交流会議のあり方について検討し、それぞれの想いを出し合い、今後も4つの柱を大切に、交流会を盛り上げていきたい、と共有された。次年度は事務連絡体制の整備をし、より多くの参加者とともに、メンバー交流会議を進めていく。



2. 浜砂会

1) 今年度を振り返って

浜砂会は月一度の定例会・談話会・ミニバザーの他に、日帰りバス旅行・暑気払い・忘年会・新年会等の親睦行事を行った。定例会では、やどかりの里の職員・メンバーを招き、障害年金・やどかりの里の資源・貴重な体験談等を語っていただいた。

昨年より進めていた浜砂会40周年記念誌が多くの方々の協力を得て、11月に発刊された。また、みんなの茶の間をモデルとする「はまサロン」を、ルポーズの協力を得て4月より第3木曜日に和気あいあいと開催している。2月には、訪問医療を始められた竹林宏先生を招き勉強会を行った。

その他、埼玉県・さいたま市より、家族のための相談事業電話相談を受託した。「家族による家族学習会」を連続5回開催した。外部定期活動として、さいたま市精神障害者家族会連絡会（以下市連絡会）、さいたま市障害者協議会、埼玉県精神障害者家族連合会（以下埼家連）の総会、理事会等に参加している。

2) 参加した活動等（抜粋）

- 4月 ・40周年記念誌発行編集会議
- 5月 ・アートフルゆめまつり
・埼家連定期総会
- 6月 ・市連絡会定期総会
・やどかりの里定期総会
- 7月 ・市民会議
・埼家連電話相談研修会
・さいたま市役所と懇談会
- 8月 ・おやじの会と交流昼食会
・さいたま市防災訓練
- 9月 ・電話相談実施・家族による家族学習会精神家族教室（講師：蔭山正子先生）
・里祭・あおぞらハウス地鎮祭
- 10月 ・やどかりの里大バザー
・第39回障害者まつり
・40周年記念誌発行編集最終会議
・さいたま市障がい者週間相談ブース担当

- ・みんなネット関東大会 in 栃木
- ・国会シンポジウム「家族負担の解消を目指して」
- ・社会保障社会福祉は国の責任憲法25条を守り活かそう 10.25 日比谷
- ・保健所家族教室
- ・埼家連家族会交流会
- ・呉秀三上映会
- 11月 ・埼玉障害フォーラム学習会「パラレルレポートを学ぼう」
・埼家連電話相談研修会
・参議院厚生労働委員会「社会保障及び労働問題等に関する調査」増田常務理事参考人傍聴
・埼家連講演会（講師：蔭山正子先生）
・さいたま市長宛要望書提出
- 12月 ・やどかりの里餅つき大会
・市民会議
- 1月 ・埼玉県参加推進事業作品展出品
・やどかりの里家族の集い
・埼家連研修会「WRAP」
・家族学習会振り返り会
・メンバー体験発表交流会
- 2月 ・やどかり出版主催「体験発表会」
・やどかりの里コンサート2018「しげちゃん一座」
・埼家連電話相談振り返り会
- 3月 ・みんなネットフォーラム2018（講師：伊勢田堯先生）
・家族学習会アドバイザーセミナー
・保健所主催家族教室
・精神家族教室「精神科訪問医療を考える」（講師：伊藤順一郎先生）

3) 今後に向けて

昨年度の試行錯誤の経験を活かし、今年度は新しい催しにもチャレンジした。これからは浜砂会のあり方・役割として、会員同士の親睦を通して家族1人1人が元気になること、やどかりの里や他の家族会とともに支え合い学び合い現実を知り、地域に行政に声を挙げていくことを続けていく。その先の目指す地域は日本健康福祉政策学会さいたま大会の壁新聞発表に際して、やどかりの里とともに描いた「未来図」である。

3. おやじの会

おやじの会が発足して4年、会員は17人となり、毎月定例の会合（第3火曜）を喫茶ルポーズで行っている。

1) 今年度の活動について

(1) 学習会等への参加

「精神障害者のご家族のための後見人勉強会」「生活保護と憲法25条」「人は人を浴びて人になる」「障害者政策委員会」傍聴、他講演会や映画、TV、雑誌等の紹介も行った。やどかりの里理事会の内容も共有した。

(2) 参加した行事について

やどかりの里のさまざまな活動に一体的、積極的に参加した1年となった。特に「やどかりの里家族の集い」は、おやじの会からも2名の体験発表が行われ活況を呈した。大バザー、餅つき大会では地域の人々も参加して大いに盛り上がった。

さいたま市精神障害者家族会連絡会と市の懇談会では、平成31年度予算に係る精神障害者の医療、保健、福祉政策の充実に関する要望書について市の政策担当者と質疑応答を行った。市議会では賛同する議員のアウトリーチ関連の質問に市側から前向きな回答を得た。

みんなネット関東ブロック栃木大会では家族・当事者の自立について活発な議論が交わされた。

障害者祭り（障害者交流センター）にボランティアとして参加した。

(3) その他の活動

- ・やどかりの里職員、ピアサポーターを講師として招き、情勢共有や意見交換を行った。
- ・「障害者週間」市民の集いにはボランティアとして参加した。
- ・川柳をさいたま市家族会連絡機関紙『かれん』などに投稿した。
- ・暑気払いは浜砂会と合同で楽しく行われた。
- ・メンバーの誕生日に会員のメッセージ入り色紙を配った。

2) 今後の課題として

昨年は旧優生保護法と障害者雇用水増し問題がかつてないほど注目された1年であった。人権無視、偏見・差別のない社会を目指し、家族、当事者が自分の「居場所」と「役割」を見出して、孤立を防ぐことが求められる。

今後の課題として3点を挙げる。

(1) 精神保健問題の啓発を地域で行う

精神疾患を抱える当事者が地域での孤立を防ぐため、自治会、小中学校に精神保健をテーマとした講演会などの機会を得て、精神保健の問題は住民全体の問題であると理解を求めていく。

(2) おやじの会の活性化

① 広報活動の強化

チラシ配布拠点を増やし会員の増加

② 情報収集

市、やどかりの里、他の家族会、メディアから質の良い情報を得て会員と共有する

(3) やどかりの里や浜砂会との連携

メンバー1人1人に合ったオーダーメイドの支援を模索する。